

1984年度 卒業礼拝説教 初めに光あれとのたまひし神

藤 井 炉 草

Rosoh K. Fujii: The God Who Said in the Beginning, "Let There Be Light."

宗教部主事の松木先生から本年度の卒業礼拝の説教を私にするように頼まれましたが語学の教師の私には出来そうに思えませんでした。ご卒業なさる皆さんへのはなむけとして今日まで経験してきたことを述べさせていただくことにしました。どうぞお楽な気持ちでお聴き下さい。

私は九州筑後柳河藩の海老名弾正という武家出身の人を知りました。明治維新の改革も一応おわり、士族も平民も国民一体となって新しい日本をうち建てようとする希望に燃えていました。それには先ず立身出世をしなければならぬと考えていたのです。それは自分だけ偉くなって他の人々を支配しようとするのでは決してありませんでした。大和民族として世界のどの民族とも交じわってゆこうとすることを望んでいたからです。

勿論一方には文明開化に反対し、儒教に基づいて立派な武士とならなければならぬと考える人々もいました。「治国平天下」自分の国を治めて天下を泰平にしてやらなければならないと主張しました。

その頃、黒田藩主の招きでキャプテン・ジェーンズというアメリカの軍人が熊本に来て学校を開きました。読み書き算数と云わず英語数学地理の初歩的な科目を教えました。これを当時は洋学といい、その学校を熊本洋学塾と名づけました。これが長崎では蘭学と呼ばれました。こうして熊本洋学塾には武家育ちの青年たちが集って来たのです。ジェーンズは毎土曜日の夜には英語で聖書の話をしました。次第に彼の人柄にふれるにつれ、約30名程の若者が信仰をもつようになり、遂に熊本の花岡山に集合し各自が署名血判をして自分の信仰を告白するようになりました。

当時キリスト信者になることは、今日の私たちにはとても考えられない命がけのことでした。そのために或る者は親から勘当され廃嫡されたりしました。また一般の人たちからヤソ教徒と侮辱されたのです。海老名弾正も自活の道を

求めて京都に来ました。そして京都で同志社の新島護先生の薫陶をうけ、遂に伝道者となる決心をし、数年後に東京の本郷教会の牧師となったのです。

この本郷教会員に、ライオン歯磨の創立者になった小林富次郎という実業家がいました。越後の酒造りの家に育ち、酒をあびるほど飲む経験の持主でした。海老名牧師は儒教をキリスト教に代えて治国平天下を生涯の目標として立った人で、小林富次郎は越後から出て来た名もない平民でした。しかし彼は万事が実践型で教えられたことが善いと思ったら実際にやって見なければ気がすまない人で、海老名牧師と全く同じ実行型の人でした。ただ一つ相容れられない点は禁酒のことでした。

実は数年前に大阪女学院に大下あやと云う英語の先生が居られ、その方が海老名先生の次女でした。大下あやさんは本郷教会でお姉さんと、オルガンを弾いたりしていたことを記憶しています。私達二人はまだ十代で皆さんより若かったのです。大阪女学院の中で十代の昔話をお互に話し合えた教師は無いのではないかと考えています。大下さんはよく話してくれました。父は禁酒のことでは何度議論あったかしのです。父はお酒を飲む習慣がないものですから禁酒の問題を簡単に説くのですが、富次郎さんは、禁酒はそんな簡単なことではありませんよと反論します。酒の中に漬った経験者と謹厳な武家育ちの人と意見が合わないのも無理はありません。海老名先生禁酒はそんなに易しい問題ではありませんよと反対します。私一個人のことなら、今すぐにもやめられますが、酒というものは人間の心を浮々させ、日頃の鬱憤を酒にまぎらせてはらすことが出来ますしあとで酒に酔っていたのと言い逃れが出来ます。すると父も、もし誰か特別に偉いお方がお盃を下さるとしたらどうです、と逆襲します。その頃は天盃とって非常に名誉なこととされていました。すると富次郎さんは誠にあっさり、お断りしていけないなら喜んで戴きますといいますと、それでは禁酒にならないでしょうと反論します。すると小林富次郎は手真似で、なみなみとつがれた盃を髪の毛にかけ格好をして有難いことです、髪の毛がお酒にぬれて身にしみじみと頂くことが出来ますとこたえますと、流石に父は、いやこれはこれは私の負けだと言いました。

当時の本郷教会には小林富次郎の他に東京（帝国）大学政治学部教授で大正デモクラシー運動の主導者であった吉野作造先生、早稲田大学の内ヶ崎作三郎教授、まだ東大生であって後に広島の大原社会問題研究所々長となり、片山内閣のとき文部大臣になられた森戸辰男氏がいました。東大政治部の学生が30

人ほども教会の礼拝に来ていました。また大杉栄も海老名先生の説教を聴きに来ていましたが、後に幸徳秋水と交わり、コンミニストとなり活動しましたが、関東大震災のとき陸軍憲兵の甘粕大尉に殺害されてしまいました。

その頃私は本郷林町の海老名先生のお宅によく行きました。家庭の人となると教壇の説教者とはうって変った誠にしとやかなお爺さまでした。大きな猫が膝の上にねむり、先生は猫をなぜながら、小林富次郎という人は実に偉い人物です。儒教では「仁者は富まず」と教えていますが小林富次郎は仁者であって富をつかった人です。禁酒運動の会長としてよく働き、また種々な社会福祉事業にも惜みなく援けられました。

しかし小林富次郎がどうしてこのような熱心な基督信者になったのか分かりませんでした。後に小林家の方々と親しく交際するようになって聞いたことですが、富次郎さんは若いうちに越後を出て神戸に来て、長瀬と云う人の経営する石鹼会社に丁稚になったことです。この石鹼会社は、現在でも花王石鹼で知られている会社です。クリスチャンである社長の長瀬さんが伝導集会に丁稚の富次郎をつれてゆきました。その時の牧師さんを「おさだ」と聞き覚えていますので永田牧師として置きましょう。その晩の説教は新約聖書マタイによる福音書第5章39節でありました。『たれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬も向けてやりなさい。悪い人に手向をしてはいけない』というイエスの言葉でありました。説教が終るやいなや、一人の若者が教壇にかけ登り、永田牧師の頬を数回ひどくなぐり、左の頬も向けてみせろと云って更にひどくなぐり続けました。このために当日の伝道集会はすっかりだめになってしまいました。永田牧師はうたれるままだ両手を床につけて、無言のままでした。この思いもよらぬ出来事をじっと見つめていた人がいました。それは丁稚の小林富次郎でした。それは誠に神御自身が彼の心を開いたのであります。一切の始めに、光あれとのたまひし神であります。地上のすべての出来ごとは決して偶然ではありません。その背後には深い神の御働きが秘められているのです。永田牧師がなぐられても無言のまま床に手をついていた時に何をひたすら祈られていたのか、それをじっと見つめていた小林富次郎の胸底に血汐したたる十字架上のキリストがどのように迫ったか、私にはとても解き明かすことは出来ません。ただ私なりに『光照り出でよと仰せになった神がキリストの顔に輝く神の栄光を識らせるために私たちの心をも照し給うのであると使徒パウロがコリント第2の手紙4章6節に示した言葉に同調するばかりです。

皆さん！ 私たちは順境を願い求め逆境の中にいたくはありません。自分自身のこと、家族のことではなくとも友人先輩の不幸が胸につまります。人は不幸や逆境の中からこそより貴い自己を見出すことが出来るのです。それらは神の隠くされたる賜物と申してよいでしょう。隣人に対して深い同情や、苦しみを分かち合うことが無い人生がどうして生き甲斐のある生活と神のみ前に言えましょうか。この一事を今深く決心して下さい。皆さんの新しい人生の門出に心から御祝福を祈らせていただきます。

「われらの父なる神よ、み前にある若き姉妹たちは暖い学窓を後にして、更に広い深い人と人との触れ合いにはいろいろとしています。願くは、父なる御神あなたの愛し給う子として受け容れ、地の塩となり世の光となって、全生涯を勝ちぬくこととなりますよう御導き御護り下さい。知らずして多くの人々を幸にする生涯へとすすませ給え あなたの御祝福をひたすら祈り奉ります。

聖き御名によりて。アーメン。